「旬」の植物紹介（11月編）

シロダモ　*Neolitsea sericea* (BL.) Koidz.　（クスノキ科　シロダモ属）

果実と花が同時に見られる植物とは何？と聞かれると「アオキ」と答える人も多いと思う。
シロダモは本州、四国、九州、南西諸島に分布する常緑の中高木。葉は裏面が灰白色で、名前の由来になっている。アオキと同様に雌雄異種であり、秋遅く（11月）に花を開く。雌株では、花と一緒と同時に赤く熟した果実も実っている。

名前の由来は、タブノキと同じクスノキ科に属し、タブの音が変化してタモになったと考えられている。シロは葉裏が白いことに由来する。シロタモからシロダモになったとされる。ただし、生育の悪い葉は白くならないので、同定の時は注意しなくてはならない。
ちなみに、アオダモはモクセイ科で、シロダモと名前は似ているが、植物としては仲間ではない。

熟した果実の果皮を取り除き、乾燥させた種子を潰すと、種子の重量に対して3割ほどの油を搾り取る事ができるそうだ。岡山県では「つづ油」と呼んで灯明油に用いたという。

↑シロダモの花と果実
（2021.1１.1 和気町）

シロダモのもう一つの特徴は春の芽出しにある。木々達が元気な新芽を展開する春先に、「枯れてる？」と思わせるだらりとした葉を垂れ下がらせている。「直射日光からのダメージを避けるため」との説もあるが、わたしは元気のないふりをして害虫どもから身を守っているのではないかと邪推している。

春になってダラリとした葉を見つけたなら、事の真相を確認してみるのも楽しい。

←シロダモの新葉：表面には沢山の産毛をたくわえている。
（植物雑学辞典から転載）

引用:岡山理科大学「植物雑学辞典」
山と渓谷社　樹木の名前」
川尻秀樹著　読む植物図鑑3